

2019年度 ボランティアセンター 年間活動報告書



フェリス女学院大学ボランティアセンター

2019年度ボランティアセンター年間活動報告書 目次

はじめに	ベンヤミン ミドルトン教授	1
I フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業		
1. 中期計画（17—20PLAN）		2
2. 2019年度の活動をふりかえって		3
II 2019年度活動報告		
学生主体の企画と連携		
【国際・平和人権】		
アンネのバラ		7
アンネ・フランク生誕90周年記念企画展示（ボラセン x 附属図書館）		10
アンネ・フランク生誕90周年記念講演会		13
【教育支援】		
緑園東小学校 ふれあい学習サポート		14
【多文化共生のために】		
多文化まちづくり工房、ABC フリースクール		15
【地域と共に】		
第17回緑園新春コンサート		16
寿町炊き出し・夜回り・バザー		18
ふれあい“ザ”いずみ軽スポーツ大会、横浜マラソン2019 ボランティア		19
幼稚園での演奏ボランティア		
農業プロジェクト・子ども食堂		20
【環境保護】		
使用済み切手・書き損じハガキ収集		21
ペットボトルキャップ収集		
【国際協力】		
神奈川県ユニセフ協会「1day for Africa2019」@赤レンガ倉庫		22
TICADVII チャリティーランチ・アフリカ料理（クスクス）		23
サマーコンサート～合唱でつながる日本とアフリカ～		
<授業連携>TICADVII（第7回アフリカ開発会議）特別講演会		24
TICADVII 本会議 ボランティア（外務省主催）		25
TICADVII サイドイベント 国際シンポジウム		26
日本赤十字社「アフリカの人道危機」-ボイス・オブ・アフリカ- 写真展・講演会		27

【防災】			
防災シンポジウム「減災教育のあり方と大学の役割」			28
学生スタッフ研修会・イベント			
2019年度 第1回 学生スタッフ研修会			30
” 第2回 学生スタッフ研修会（防災、他大学交流会）			31
大学ボランティアセンター 学生スタッフリーダーセミナー2020@大阪			33
大学祭 「防災・農業プロジェクト等、活動紹介」展示			34
学生のボランティア活動報告			
(1) 国内ボランティア			
【災害被災者支援】			
東日本大震災被災地支援ウィンターキャンプ	コミュニケーション学科 3年		35
東日本大震災被災地支援ウィンターキャンプ	コミュニケーション学科 3年		36
【教育・子ども支援】			
ABC ジャパン フリースクール	国際交流学科 2年		37
(2) 海外ボランティア			
チャイルドケア（サンフランシスコ）	国際交流学科 2年		40
(3) 国際機関実務体験プログラム（夏期・春期）			
国際連合世界食糧計画 WFP 協会	国際交流学科 1年		43
国連食糧農業機関（FAO）	音楽芸術学科 1年		46
Ⅲ ボランティアセンター資料			
ボランティアセンター規程			49
ボランティアセンター運営委員会規程			51
ボランティアセンター運営方針			53
アンケート結果（ボランティアセンター来訪者）			54
ボランティア説明会 実施報告			57
2019年度活動実績			59
おわりに	堀尾藍コーディネーター		61

はじめに

ボランティアセンター長 ベンヤミン ミドルトン

1929年6月12日に誕生したアンネ・フランクは、将来ジャーナリストになることを目指したが、残念ながら1945年3月にアウシュヴィッツにてチフスに感染して逝去した。2003年11月、アンネ・フランクを平和の象徴として、ベルギーの園芸家であるヒッポリテ・デルフォルヘが品種改良したアンネのバラ（Souvenir d' Anne Frank、日本では「アンネ・フランクの形見」といわれる）が元学長本間慎氏を通して、当時のNPO法人ホロコースト教育資料センター副理事長だった故・黒川万千代氏の協力により、バラ育苗家の山室健治氏から「アンネのバラ」の寄贈を受け、フェリス女学院大学緑園キャンパスに植樹された。同時に、ボランティアセンターにて「アンネのバラ育成プロジェクト」が発足した。これまで継続して学生スタッフらが日々の水やりや剪定等を行っており、バラ園では春から秋まで美しい花を観賞することができる。

本年度は、このアンネ・フランクの生誕90周年となり、学内にて、明治学院大学樋口隆一名誉教授による講演会、図書館と連携してアンネ・フランクに関する企画展示を開催し、学生が命の尊さ、民族や宗教や文化等による差別の撤廃を考える機会となった。また、本年度は、第2次大戦中にナチス・ドイツから逃れた多数のユダヤ人亡命者を「命のビザ」で救った杉原千畝が日本通過ビザを発給してから今年で80年となる。そこで、毎年当センターが実施している学生スタッフ研修旅行（岐阜）では、この杉原氏の軌跡をたどり、人権の尊さについて学ぶ予定であったが、残念ながら新型コロナウイルス対策のため、中止となった。

当センターでは、学生が「アンネのバラプロジェクト」をとおして、平和構築や命の尊さを学び、また、学内外の有識者による講演会等によって知識を補完し、ボランティア活動や研修会をとおして実践を重ね、自立した女性へと歩むよう、育成している。これからもアンネのバラのように、学生たちを見守り続けたい。

2020年3月

I フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業 (2019年度)

1. 中期計画 (17-20PLAN)

中期計画は大学全体で取り組む「フェリス女学院大学 17-20PLAN」の中に位置づけられ、ボランティアセンターとしては、以下の計画を実施した。(優先順位による)

中期目標 中期計画名称	事業計画名称	2019年度の成果
キリスト教精神／ For Others の実践 建学の精神と教育理念のさらなる明確化・具体化	1. 学生スタッフ・コーディネーターの育成 2. インターンシッププログラムの充実 3. 一般学生に対するボランティアセンターの周知 4. 活動報告書の充実	1は学生スタッフ研修会等を通して学生スタッフの育成を強化した。2は「国際機関実務体験プログラム」を通して、国際連合世界食糧計画 WFP 協会や国連食糧農業機関 (FAO) へ学生を派遣し、内容の充実を図った。3は、広報ツールを充実し活用することにより、ボランティアセンターの利用者を増加させた。4は、学生のボランティア先が充実したことによって、報告書の内容もそれに比例した。
キリスト教精神／ For Others の実践 「女性のエンパワメント」構想の実施と検証	1. ジェンダー平等や女性の人権に関する意識の向上	TICADVⅦ公式サイドイベントとして「アフリカと女性—グッドガバナンスに対する女性の役割—」をテーマに国際シンポジウムを実施 (参加者 70 名、参加学生スタッフ 3 名)。また、アンネ・フランク生誕 90 周年記念講演会「1938 年頃の日本におけるユダヤ政策と樋口季一郎」を実施。国際社会や国内、地域における女性に関する課題に対して、より学生の意識が向上した。
学生支援・キャリア形成支援の充実に向けた取組 正課外活動支援	1. 地域連携事業の実施 2. 被災地支援活動の新規開拓 3. 他大学のボランティアセンターとのネットワーク拡充 4. 学生によるボランティア活動の広報ツール作成 5. サービスラーニングに関する調査・研究	1は、地域に根付いた認定 NPO 法人「だんだんの樹」と共催で緑園新春コンサートを開催。2は、防災シンポジウム「減災教育のあり方と大学の役割～子どもから高齢者まで誰一人取り残さない～」を開催。また、学生スタッフによる東日本大震災等の被災地支援を継続させた。3は学生スタッフ主催で、他大学との交流会を実施し、ボランティアセンター同士の交流を深めた。4は、学生スタッフによる広報動画を製作。学生が広報活動に携わるため、動画編集の講習会を実施。5は学生が大学で学んだことを如何にして地域の課題解決に結びつけるか、研究を深めた。今年度の取り組みの一つである ESD(持続可能な開発のための教育(ESD:Education for Sustainable Development))を次年度につなげる。

2. 2019年度の活動をふりかえって

今年度は、環境及び食糧問題に関心のある学生スタッフからの提案で、農業プロジェクトが発足した。学内のプランターで栽培した野菜を子ども食堂へ食材として提供した。

6月20日の「世界難民の日」にちなみ、ボランティアセンター学生スタッフが中心となり、6月17日（月）～21日（金）の期間中、学食にてチャリティーランチを実施した。有志の方からの献金を含め募金額は4,384円（1食あたり30円を寄付）になり、特定非営利活動法人アフリカ日本協議会（Africa Japan Forum）に寄付した。ご賛同下さった皆様に、心より感謝申し上げたい。

また、12月16日に「減災教育のあり方と大学の役割～子どもから高齢者まで誰一人取り残さない～」をテーマに、防災シンポジウムを開催。本講演会は、国際交流学部のベンヤミン・ミドルトン教授、上原良子教授の授業と連携した。

学生スタッフの活動は、1、2年生が中心となり、大学祭などのイベントや、日々のミーティングの運営に力を入れていた。研修会や他大学ボラセンとの交流会も企画・参加し、センターのシフト（情報整理や相談対応のためにセンターに待機）には積極的に関わっていた。また、情報発信のための工夫として始めたFacebookやInstagramのサイトを継続的に活用してくれた。

（1）センター実施業務

①一般学生へのボランティア活動に関する情報提供

a.情報提供：大きく分けて、「ボランティアセンター学生スタッフの活動」「ボランティアセンターのプロジェクト」「関係団体等からのボランティア情報」の3種類の情報を提供している。方法としては、学内掲示、センター内資料（活動分野別団体ファイル、関連図書、各種ボランティア活動情報のチラシ等）、HP、SNS（情報提供者MLに登録希望をした学生への定期的な情報提供等）などを通じて閲覧できる。

b.説明会・相談会：4月～5月および10～11月に以下の説明会を開催した。（単位：名）

	参加者数	
	春	秋
ボランティアセンター・バリアフリー推進室合同説明会（春2回） ボランティアセンター説明会（秋）	135	40
ボランティア（5日間）	10	
緑園東小学校放課後ふれあい学習サポート・上白根中学校アシスタントティーチャー説明会	20	
NPO インターンシップ説明会	20	
国際機関実務体験プログラム説明会	40	20
海外ボランティア説明会（CIEE）	30	20
ボランティア活動科目履修相談会	10	

②ボランティア活動の相談業務

a. 相談業務：コーディネーター、職員および学生スタッフが、来訪者の相談に応じている。

開室時間 月～金 10時～17時。2019年度は84名の学生が来室した。

b. ボランティア活動科目履修の相談業務

今年度の履修登録者数は次の通り。(単位：名)

		前期	後期	活動内容
ボランティア活動1 (45時間)	国際交流学科2年		1	NPO法人 ABC JAPAN (日本語教育支援)
ボランティア活動2 (90時間)	英語英米文学科3年	1		アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (IUC)
	国際交流学科2年		1	Chibi Chan Preschool (一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会) / サンフランシスコ)
	国際交流学科1年		1	国際連合世界食糧計画 WFP 協会

c. 学生スタッフ・コーディネーターの活動支援と研修

今年度は、学生スタッフ38名、学生コーディネーター(2年目以上)18名、合計56名が活動した。

③ボランティア活動保険登録手続きの代行

手続き取扱い者数 75名

④学内組織・ボランティア系団体との連携

レパスト(学食)、学食環境向上委員会(Ferris Lunch Committee)と連携し、メニューの企画・試食を重ね、アフリカ料理「クスクス」のチャリティーランチを実施。

⑤学外組織との連携

a. NPO インターンシッププログラム(2009年度開始事業)

NPO 法人アクションポート横浜との連携によるインターンシッププログラムへの学生の派遣は2019年度無し。

b. 国際機関実務体験プログラム(2005年度開始事業)

公益財団法人横浜市国際交流協会(YOKE)を通じて実施。横浜市内6大学(フェリス、明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、國學院大学、神奈川大学)が参加しており、国際機関・国連機関での実務体験活動に学生を派遣。

2019年度派遣は次の通り。(単位：名)

派遣先	夏期	春期
国際連合世界食糧計画 WFP 協会	1	
国連食糧農業機関 (FAO) 駐日連絡事務所		1

- c. 神奈川大学教育支援センター・横浜市立大学ボランティア支援室の学生スタッフ来訪。他大学の活動を知り、お互いの問題点・解決策について話し合い、交流した。
- d. 泉区社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会
運営委員として参加。
- e. 泉区社会福祉協議会主催による、障がい者との「ふれあい軽スポーツ大会」
アナウンスボランティアとして、音楽芸術学科2年(1名)、コミュニケーション学科1年(1名)、国際交流学科1年(1名) (計3名) が参加。
- f. 演奏ボランティア
横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園のクリスマス会で、国際交流学科1年(2名) が演奏。
- g. 横浜マラソン
横浜マラソン組織委員会主催の横浜マラソンで、競技サポートボランティアとして参加。

⑥学外団体への寄付・募金

- ・ 特定非営利活動法人アフリカ日本協議会 (チャリティーランチ)
- ・ 寿地区センター (タオル等の日用品を寄付)
- ・ 寿地区センター (緑園新春コンサートでの募金)
- ・ 認定 NPO 法人だんだんの樹 (「子ども食堂」へ学内で栽培した食材を寄付)
- ・ 世界の子どもにワクチンを日本委員会 (「NPO 法人ともにあゆむ」を介して、ペットボトルキャップ回収の収益を寄付)
- ・ 学校法人アジア学院 (国内外の使用済切手、未使用切手、書き損じハガキを収集し寄付)

(2) 学生スタッフ・コーディネーターの活動

- ① 諸団体・組織からのボランティア募集情報やイベント情報などのチラシ、ニュースレター等の整理と掲示
- ② センター来訪学生への相談対応
- ③ 定例ミーティングの開催 (アジェンダ作り、司会、議事録作成等を担当)
- ④ 外部団体や学内活動との連携
- ⑤ ニュースレターの定期発行 (4月、10月)
- ⑥ 研修会年3回実施 (今年度は5月、9月の2回実施)
- ⑦ 大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー (ユースビジョン主催、2月) への参加

(3) プロジェクト

2019年度は以下のプロジェクトを実施した。①～⑥は継続事業（事業開始年順）、⑦は新規事業である。

① 第17回緑園新春コンサート（2003年度開始事業）（詳細16頁）

認定NPO法人だんだんの樹（泉区・高齢者支援）との共催、泉区社会福祉協議会の後援として開催。学内では宗教センターの協力を得て実施。地域との連携事業となっている。主に学生スタッフの1年生が中心となって、プロジェクトの企画・運営をしている。

② アンネのバラプロジェクト（Peace from Anne）（2003年度開始事業）（7頁）

平和に関するプロジェクトとして、園芸ボランティアや記念礼拝があり、後者は宗教センターと連携して実施している。

また、アンネ・フランク生誕90周年関連イベントとして、NPO法人ホロコースト教育資料センターより、パネル資料『アンネ・フランクと希望のバラ』を借用し、附属図書館と連携して、企画展示を実施。また、11月に「1938年頃の日本におけるユダヤ政策と樋口季一郎」をテーマに、アンネ・フランク生誕90周年記念講演会を開催した。

③ 緑園東小学校放課後ふれあい学習サポート（2004年度開始事業）（14頁）

地域の小学校との連携事業として、毎週木曜日（14時～16時）に緑園東小学校図書室にて実施している。参加学生は延べ71名、実施回数は26回。学習支援は、緑園東小学校の他、上白根中学校でのアシスタントティーチャーがある。また、地域の学習支援NPOなどから多数のボランティア募集が来ており、学校教育現場からの支援ニーズの高まりを感じている。

④ 使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付（2008年度開始事業）（21頁）

学校法人アジア学院へ寄付した。

⑤ ペットボトルキャップの収集（2008年度開始事業）（21頁）

キャンパスにてペットボトルキャップを回収し、泉区のNPO法人「ともにあゆむ」を介して、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」からワクチンが提供される。

⑥ 寿町への支援（18頁）

今年度は、タオル等の日用品をバザーへ寄付した。

⑦ 農業プロジェクト（2019年度開始事業）（20頁）

学内にてプランターを使用して野菜を栽培し、収穫した野菜を泉区内の認定NPO法人「だんだんの樹」が運営する「子ども食堂」への食材として提供した。

Ⅱ 2019 年度活動報告

学生主体の企画と連携

アンネのバラ

今年もフェリス女学院大学の緑園キャンパスにアンネのバラが満開となった。アンネのバラは、本間慎元学長を通して黒川万千代氏（当時、ホロコースト教育資料センター副理事長・故）のご協力を頂き、バラ育苗家の山室建治氏より寄贈を受けて、2003年11月17日、植樹された。この年、廣石望初代ボランティアセンター長を中心に「アンネのバラ育成プロジェクト」が発足し、以来、学生たちの精力的なボランティア活動に支えられ、アンネのバラが育成されている。



6.12 アンネのバラ記念礼拝



11.13 アンネのバラ植樹記念礼拝

「アンネのバラ」は、蕾の時は赤、開花すると黄金色になり、時間の経過とともにサーモンピンクに変色し、やがて更に濃いピンクに変色するという具合に、色が変わっていく。さまざまに色を変えるバラを「アンネのバラ」として選んだことには意味がある。

アンネは豊かな才能を秘めたまま戦争と民族差別のために、若くして命を奪われた。そんな彼女が生きていたなら、その才能を活かし、人生において幾つもの美しい花を咲かせたに違いない。多彩に変容する「アンネのバラ」には、多くの可能性を秘めたアンネを表現し、平和を祈るといふ、このバラを作出したベルギー人園芸家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏の願いが込められている。

1971年、大槻道子という日本人がオットー・フランク氏と奇跡的に出会い、翌年のクリスマスにフランク氏からバラを分けて頂いた。その後、山室隆一氏にバラの増殖が託され、隆一氏が亡くなられた後はご子息建治氏がその栽培を受け継ぎ、アンネのバラは「戦争のない、平和な世界に」というアンネの願いとともに、日本全国に広まっている。



アンネバラのポプリ作成作業



礼拝後、ポプリをお渡し。

【アンネのバラ礼拝】6月12日（水）緑園チャペルにて

奨励 国際交流学部2年

皆さんはアンネフランクという女の子を知っていますか？第二次世界大戦中、ナチスによるホロコーストから逃れるため隠れ家に身を潜め、約2年間にも及んだ隠れ家生活を日記に綴った『アンネの日記』作者のユダヤ系ドイツ人の少女です。

まず、皆さんは隠れ家での生活がどういったものであったかご存知ですか？アンネを含めた8人が住んだのはオランダ・アムステルダムの香辛料会社の3階、4階、5階を改造したところでした。ここはアンネの父であるオットーフランクの職場事務所であり、人の出入りがとても多いところでした。ゆえに、トイレは人の出入りが無くなった夜のみ、カーテンは開けてはいけなく、などくしゃみ一つにも神経をとがらせなくてはいけない生活でした。そんな生活が2年余り続いたなか、秘密警察に捕まりドイツのベルゲン・ベルゼン強制収容所で15歳という若さで亡くなっています。

私が初めてアンネフランクという女の子を知ったのは、小学生のころでした。小学校に併設されている図書館に並ぶ、偉人の伝記シリーズの中にアンネはいました。当時はどうしてこんなにかわいい女の子が偉人シリーズの中に名を連ねているのだろうと不思議に思った記憶があります。ですが、アンネの伝記を読んだ瞬間から15歳という若さで亡くなったこの少女のことが忘れられなくなり、アンネのことを調べ、知れば知るほど大好きな存在となりました。

アンネが生きた時代というのは第二次世界大戦の真ただ中、ヒトラーが台頭した時代でした。皆さんもご存知の通り、激しいユダヤ人狩りがなされ、ホロコーストから逃れるべく多くのユダヤ人が身をひそめ、息をひそめながら生活をしていました。アンネは多彩な才能を持っていた女の子で、小学生のころは女優に、中学生になってからはジャーナリストになりたいという夢を持っていたごくごく普通の、活発で笑顔が素敵な女の子でした。ですが、ホロコーストが日に日に激しさを増していく中で、ユダヤ人に対する規制が強まり、外遊びが大好きだったアンネ達が遊ぶ公園は遊べなくなり、アンネが大好きだったアイスクリーム屋さんもユダヤ人は購入してはいけない、トイレや公共施設もユダヤ人は入ってはいけない、などとどんどん自由が無くなっていきました。ですがこのような生活の中でも、アンネは希望を忘れず、自身の誕生日に両親がプレゼントしてくれた赤いチェック模様の日記帳にキティと名前をつけ、自身の親友とし、親友に語りかけるように日常の様々な様子や物語を綴り毎日を明るく生きていました。その生活は隠れ家にいても変わることはなく、アンネはたくさんの言葉を残してくれています。私が初めてアンネの日記を読んだのは小学6年生の時、簡略化された絵本のようなものでしたが、いまだに心に残っているアンネの言葉があります。『私が私として生きることを許してほしい。』これは1944年4月11日にアンネが書いた日記の中に記されている言葉です。この言葉を残した約4か月後の8月4日にアンネはナチス親衛隊に発見され、ナチス強制収容所へと移送されました。そして、その約半年後にアンネは強制収容所内でチフスに感染し亡くなってしまいます。

彼女は最後まで、自分らしく、希望を持って生きることはできたのでしょうか。

ここで、聖書をお読みいたします。

新共同訳 詩編9編19節

『乏しい人は永遠に忘れられることはなく、貧しい人の希望は決して失われない』

貧しさや絶望の中にいると、何もかもがもう終わりだと自暴自棄に陥ることもあるでしょう。ですが、そんな中に希望を見出し、心の拠り所にすることが大切だとアンネは日記

を通して私たちに教えてくれました。

アンネは日記の中で、「私の想像の翼は、閉じ込められても閉じ込められても、羽ばたき続けるの」と言っています。アンネは日記を心の拠り所にし、たくさんの物語を書くことで自分の希望を文字化して解放された後の未来を想像していたのだと私は思います。

今年、アンネフランクが生まれて90年がたちました。この90年間でドイツ・日本は目覚ましく発展し、見事な戦後復興を遂げました。また、この90年の間に女性の社会進出も目覚ましいものとなり、人種差別や人々の争いもゼロではありませんが、着々と平和へと近づいてきています。

最後に、もう一つだけ、アンネの言葉を紹介したいと思います。

「世界をよくすることを始めるのに誰も一瞬ですら待つ必要なんてないんです。」

第二のアンネフランクという少女が生まれなかったために、私たちに出来ることは何かあるでしょうか。普段何気なく生活しているこの平和な生活がいつまでも続くように、身の回りでできることから探してみませんか。アンネの平和への願いがもっとたくさんの人に伝わりますように。

アンネ・フランク生誕 90 周年企画展示（ボラセン x 附属図書館）

NPO 法人ホロコースト教育資料センターより、パネル資料『アンネ・フランクと希望のバラ』を借用し、附属図書館と連携して、アンネ・フランク生誕 90 周年企画展示を行った。また、アンネ・フランク関連書籍コーナーが設置され、学生たちにとってアンネ・フランクと平和について考える良い機会となった。

期間：6月3日（月）～7月31日（水）

場所：附属図書館、CLA 棟 2 階ボランティアセンター



パネル展示・アンネ関連書籍コーナー設置@図書館

エッセイ作品展「平和への願い」

アンネ・フランク生誕 90 周年にちなみ、「平和への願い」についてエッセイ作品を募集し、CLA 棟 2 階ボランティアセンター前で作品展示を実施した。

期間：6月3日（月）～7月31日（水）

場所：CLA 棟 2 階ボランティアセンター前

「平和への願い」

・私がアンネ・フランクという人物を知ったのは小学生の頃です。世界の偉人の漫画を読むのが好きで、その中にアンネ・フランクが居ました。彼女の一生と意思の詰まった日記は幼い私の胸に深く残っていました。

大学に入り、ボラセンでアンネバラプロジェクトがあるということに運命さえ感じました。バラの存在はそれまで知りませんでした。美しく咲いてくれるアンネバラはどんなに疲れていても心を明るくしてくれます。今年でアンネバラが美しく咲くのを見るのは3年目です。いつまでも美しく咲きますように。

（日本語日本文学科 3 年）

・アンネのバラを目にするたび、平和の側面を見ているような気になる。本当の「平和」とは何なのだろうか。真実の「愛」とは何なのだろうか。一人の少女を知り、あのバラのように凜としつつも、どこか柔らかさを持ち合わせた女性でありたいと思う。

（音楽芸術学科 2 年）

【アンネのバラ植樹記念礼拝】 11月13日（水）緑園チャペルにて

奨励 国際交流学科 2年

みなさん、このフェリス女学院大学にアンネバラという美しいバラが咲いていることをご存知でしょうか？エフカフェを出てすぐ右側に見えるのがアンネバラです。

今日、11月13日はアンネバラ植樹記念礼拝です。2003年11月17日、このフェリス女学院大学に植樹されて以降16年にわたり、毎年記念礼拝をおこなっています。

先日、宗教センターにてアンネバラに関する1冊の本をお借りしました。本の中に、アンネフランクが愛していた「平和」と「自由」についてこんなことが書いていました。

『「平和」って何でしょう？

戦争によって、自分自身や愛する人たちが傷ついたり、命を失ったりしなくて済むこと、戦車や砲弾や爆弾の音におびえなくて済むこと、

夜、静かに、安らかに、眠れること

朝、不安なく目覚めることが出来ること

食べ物が十分にあって、学校や職場に安心して通えること、おしゃべりをしたり、恋をしたり、歌を歌ったりできること…

「自由」って何でしょう？

好きな時に、好きなところに出かけることが出来ること

やりたいことが自分の責任で出来ること

自分が自分であることで、迫害されたり、不利益を被ることがないこと

「平和」であること「自由」であることが

どんなに大切で喜ばしいものか知っておいてください』

私はこの箇所に書いてあることに当たり前を感じていました。ですが、当たり前ではなく、平和があるからこそ自由があるのだと気付くことができました。第二次世界大戦を引き起こしたドイツという国がどのような志で戦後復興をしたのか、どのように未来へとつなげていったのか、有名な演説を挙げて見ていきたいと思います。

第6代ドイツ連邦大統領ヴァイツゼッカーによる、ドイツ敗戦後40年にあたる1985年5月8日に行われた連邦議会での平和と自由についての記念演説をご存知の方も多いかと思います。荒れ野の40年というタイトルで出版されていますので、ご興味のある方はぜひ読んでみてください。この演説の中で、ヴァイツゼッカー大統領は自国の犯した罪、未来の平和について演説でこう述べています。

「目を閉ざさず、耳を塞がずにいた人びと、調べる気のある人たちなら、ユダヤ人を強制的に移送する列車に気づかないはずはありませんでした。人びとの想像力は、ユダヤ人絶滅の方法と規模には思い及ばなかったかもしれません。しかし、犯罪そのものに加え、余りにも多くの人たちが実際に起こっていたことを知らないでおこうと努めていたのが現実であります。当時まだ若く、ことの計画・実行に加わっていなかった私の世代も例外ではありません。良心を麻痺させ、それは自分の権限外だとし、目を背け、沈黙するには多くの形がありました。戦いが終わり、筆舌に尽くしがたい大虐殺の全貌が明らかにしたとき、一切何も知らなかった、気配も感じなかった、と言い張った人はあまりにも多か

ったのであります。罪の有無、年老いても幼くともいづれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。だれもが過去からの帰結に関わり合っており、過去に対する責任を負わされております。

心に刻みつづけることがなぜかくも重要なのかを理解するため、年老いたものも若いものも互いに助け合わねばなりません。また助け会えるのであります。問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけではありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」

第二次世界大戦、ナチスドイツが行った戦争犯罪についてドイツは自らの戦争行為を率直に見つめ、被害者の戦後補償に取り組むだけでなく過去の歴史を繰り返さないよう平和教育に力を注いでいます。過去に目を向け、自らの歴史を見直すことは決して過去の否定や自虐行為ではなく、新たな未来を切り開くために大切なことです。ヴァイツゼッカー大統領が戦後 40 年たった後に演説にて述べた内容を受け止めて、ドイツは平和への一歩を踏み出しています。

箴言 12 章 20 節～21 節にはこうあります。

『悪を耕す者の心には裏切りがある。平和を勧める人の心には、喜びがある。
神に従う人はどのような災難にも合わない。神に逆らうものは災いで満たされる。』

直接的に聞こえてしまうかもしれませんが、過去を受け止め、未来への平和を願っていく中でとても大切にしなければいけないことだと私は思います。

悪をたくらんでいる者の心を平和に、喜びでいっぱいにするために、自分自身がまず正しい者であるようにしましょう。そうすれば、少しずつ自分だけではなく周りの平和・自由へとつながります。

今年、アンネフランクは 90 歳の誕生日を迎えました。節目であるこの年に、平和とは何か・自由とは何か皆さん考えてみて下さい。アンネフランクが愛した平和、アンネバラに込められている思いが少しでも伝えることが出来ていれば幸いです。

アンネ・フランク生誕 90 周年記念講演会

日時：2019 年 11 月 18 日（月）3 限／場所：8205 教室

テーマ：「1938 年頃の日本におけるユダヤ政策と樋口季一郎」

講演者：樋口隆一氏（明治学院大学名誉教授）

授業連携：ベンヤミン・ミドルトン教授「社会学概論 B」、矢野久美子教授「基礎演習」

目的：アンネ・フランク生誕 90 周年記念として、講演会を実施する。

講演会をとおして、命の尊さ、民族や国境を越えた人権問題について問題提議する。

概要：ユダヤ人 6000 名の命を救った日本人陸軍、樋口季一郎氏の人道支援について、孫にあたる隆一氏による講演会を実施する。日本では、外交官・杉原千畝氏がユダヤ人を助けたことが周知されているが、兵庫県淡路島出身の陸軍軍人であった樋口季一郎氏も同様にユダヤ人に対し、ビザを発行して命を救っている。この歴史的事象を通して、人権とは何か考察する。



【参加学生の声】

現代の日本ではユダヤ人を助けた英雄として杉原千畝が有名ですが、彼のビザをただの紙切れで終わらせずに次に繋げた樋口季一郎という人の存在はあまり耳にする機会がありません。今回樋口先生の講話をお聞きして、民族や出身国に関係なく困っている人たちを助けてあげることの素晴らしさを学ぶことができました。現代の世界では宗教的観念の違いなどを理由に民族同士の争いが絶えません。お互いの文化や考え方を尊重し、受け入れていくことが平和への第一歩なのだと改めて感じました。

（国際交流学科 1 年）

緑園東小学校 ふれあい学習サポート

「緑園東小 ふれあい学習サポート」は、緑園東小学校からの依頼を受け、2004年度から学生たちが継続して取り組んでいるボランティアである。毎週木曜に、放課後の小学校の図書室で、子どもたちの学習サポートを行うチューターとして活動している。

また市内の上白根中学校ではAT（アシスタント・ティーチャー）として学習支援を行う大学生の受入れを行っており、フェリス生もATとして活動している。

センターに初回来室するフェリス生に実施しているアンケートでも、子どもの教育に関するボランティアは、関心の高い活動分野である。毎年、あふれる熱意を持った学生たちが、子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら、地域の学習支援ボランティアの現場で活動を実施している。

活動日：毎週木曜日 14:00～16:00

活動場所：緑園東小学校 図書室

活動内容：チューターは、子どもたちが持参した学校の宿題や習い事の課題をサポートし、学習支援や居場所作りを提供。

例) 国語の漢字練習、算数の計算問題 等



【参加学生の声】

・毎週楽しく活動をしています。宿題を教えてあげて「分かった!」と言われる時にやりがいを感じます。将来、教職をとろうと考えているので、勉強を教えるという貴重な体験をさせて頂いていると実感しています。今後も続けていきたいです。

・素直に様々なことに興味を持つ子どもたちに、勉強に関心を持ってもらおうと努めています。声のかけ方を工夫することで、真面目に取り組んでくれる姿が印象的でした。このボランティアは、子どもたちの勉強や居場所づくりだけでなく、私自身の新たな発見につながるため、大好きな活動の一つです。

・いつも子ども達に元気をもたらしています。子どもたちと一緒に成長していけるこのボランティアはとても楽しく、やりがいがあります。私の大学生活を実り多いものにしてくれたこのボランティアに、感謝の気持ちで一杯です。この経験を今後の学生生活などに生かしていきたいと思います。

外国籍住民学習支援と出会い @多文化まちづくり工房

泉区「いちょう団地」には、ベトナム、カンボジア、ラオス、中国等、様々な国から来日された方々が居住している。「多文化まちづくり工房」(代表：早川秀樹氏)は、いちょう小学校コミュニティハウスでの日本語学習教室の開催、外国籍の子ども達を対象にした学習サポートの実施、外国籍住民の住宅入居相談(県へ協力)、外国籍住民が参加する多文化に対応する地域防災(泉区消防署と合同)など幅広い活動を実施している。その活動は、2009年11月「第40回博報賞」(財団法人 博報児童教育振興会)国際文化理解教育部門、2011年1月「国際交流基金地球市民賞」(独立行政法人 国際交流基金)にも選出されるなど、評価されている。

本学は、泉区に位置しており、同区にある「多文化まちづくり工房」へボランティア派遣を実施している。そのボランティアは、日本語教師を目指す学生のみではなく、国際協力に関心を持つ学生も参加する。また、ボランティア活動に参加したことにより、日本語教育の勉強を開始する学生もいる。

当センターの設立当初から、本学生に対する地域からのボランティア活動の期待が大きい。

多文化を背景とする子どもに対する学習支援は、日本人の学生にとっても国際文化交流や多文化理解教育としても位置付けられる。また、地域の課題の一つとして、外国人に対する防災教育がある。

外国につながる子どものための学習支援 @ABC フリースクール

NPO 法人 ABC ジャパンは、神奈川県外国人のコミュニティの支援を目的として設立され、外国人対象の日本語教室など多文化共生の推進に重点を置いている。外国につながる子どもを対象としたフリースクール「ABC フリースクール」(鶴見区)において、生徒たちの勉強のサポートをするボランティアを募集している。外国につながる子どもの教育や学習支援に関心のあるフェリス生2名が活動に参加した。

第 17 回緑園新春コンサート

1月11日（土）、本学緑園キャンパスチャペルにて、「第17回緑園新春コンサート（共催：認定NPO法人だんだんの樹、後援：泉区社会福祉協議会）」を開催した。

本コンサートでは、毎年、地域の皆様、学内外の演奏家、本学の関係者と共に新春の慶びを共有させて頂いている。学内外の演奏者は、地域やフェリスに関係のある演奏家の皆様、緑園なえば保育園の園児の皆さん、フェリスの音楽学部の学生や卒業生である。

来場者数は143名、出演者及びスタッフ数80名、合計で223名の参加となった。来場者からは「フェリス生の演奏に、地域の方々の参加もあり、とても元気を頂きました」「フェリス生が親切に案内し、コンサートを運営されていました」「普段あまり聞けない楽器の演奏に触れることが出来て、良かったです」「アフリカの方をはじめ、年齢や国に多様性がありました」などの感想を頂いた。

本プログラムは、だんだんの樹の皆様のご協力のもと、ボランティアセンターの学生スタッフが主体となって運営し、地域の方々に音楽の魅力をお伝えする有難い機会となっている。本プログラムへの深いご理解、ご協力について、この場をお借りして感謝申し上げます。

日時：2020年1月11日（土）14時開演（13時半開場）16時終演

場所：緑園キャンパスチャペル

<第1部>

♪1. ピアノ連弾 佐藤綾、原口麗子

「C.S. Chopsticks Variations」 作曲 Euphemia Allen

♪2. 合唱 ボランティアセンターとアフリカの子ども達

「Circle Of Life」 作曲 Elton John / 日本語詞 松澤薫

♪3. 三味線アンサンブル 杵屋花邦と三花会（横浜市立学校教師グループ）

三絃三重奏「夏の思い出」 作曲 中田喜直

三絃二重奏「津軽三味線に寄せて」 作曲 杵屋正邦

♪4. 声楽 田中翠、城所三紀（ピアノ）

「君をのせて」 作詞 宮崎駿/作曲 久石譲

「春」 作詞 新川和江/作曲 信長貴富

♪5. 合奏と合唱 緑園なえば保育園年長組のみなさん

①合唱 「やまびこごっこ」

②合奏 「にんげんっていいな」

③合奏 「てのひらをたいように 線路はつづくよどこまでも」

④合唱 「ぞうれっしやよはしれ」

<第2部>

- ♪6. パイプオルガン連弾 熊谷佳子、中川美香
「四手四足のためのオルガンソナタより第2楽章「詩編23」」 作曲 G.メルケル
- ♪7. 声楽 殿岡真衣、村山奈菜子、柴崎冴（ピアノ）
「春に」 作詞 谷川俊太郎/作曲 木下牧子
「瑠璃色の地球」 作詞 松本隆/作曲 平井夏美
- ♪8. トランペット&ピアノ 飯塚一奈、古田明日香
Les Misérables より「I Dreamed a Dream」夢やぶれて
作詞：Alain Boublil /作曲：Claude-Michel Schönberg
- ♪9. ソプラノ二重唱 福井早枝子、川畑順子、梅原三代子（ピアノ）
「ピエ・イエス」 作詞・作曲 ウェッバー
「歌の翼に」 訳詞 久野静夫/作曲 メンデルスゾーン
- ♪10. みんなで歌おう 小山順子、武川恵美子（ピアノ）
「手のひらを太陽に」 作詞 やなせたかし/作曲 いずみたく
「365歩のマーチ」 作詞 星野哲郎/作曲 米山正夫
「今日の日はさようなら」 作詞・作曲 金子詔一



コンサート会場入口に、横浜市中区寿地区の日雇い労働者の方々の、生活支援のための募金箱を設置し、ご協力を頂いた。集められた 27,790 円は、以下の団体に送った。
募金先：「日本基督教団神奈川教区 寿地区活動委員会」寿地区センター

寿町炊き出し・夜回り・バザー

寿町は、関内と石川町の間にある簡易宿泊所街である。ここには、失職し、居住地を失った約 6000 人の人々が居住しており、その内の 9 割以上が男性高齢者である。1 泊 2000 円の簡易宿泊所の小部屋に泊まるか、その費用のない人は、外にダンボールなどを敷いて夜を過ごしている。かつては外国からの移住労働者も多くいたが、不況の影響や、日本の出入国管理法による規制強化により、現在はその数が少なくなった。ここには、高齢者の集う「木楽な家」や、種々の障がい者福祉作業所があり、様々なボランティア活動が実施されている。

「寿地区センター」では、炊き出し、バザー、夜回りパトロール活動のほか、学生の啓発と研修のための「寿わーく」が開催されている。「寿わーく」には、学生以外も参加しており、他者と接することで視野を広げることができる。また実際に路上生活者の方々と接することで、現代社会の課題を考える貴重な機会となっている。

【寿町バザー】

ボランティアセンターでは、未使用のタオル、石鹸、使い捨てカミソリを集め、日本キリスト教団寿地区センターに送り、寿町バザーに協力している。

学生スタッフが作った収集箱は、センター内のカウンターに置かれ、随時、生活用品を募集している。

【寿町炊き出し】

炊き出しに参加することで、実際に簡易宿泊所で生活されている方の話を拝聴したり、交流をはかることができる。炊き出しは毎週金曜日に行われている。



寿地区センターの場所

ふれあい“ザ”いずみ軽スポーツ大会

5月25日（土）、障がい者との交流を目的とした泉区社会福祉協議会主催「ふれあい“ザ”いずみ軽スポーツ大会」が開催され、学生スタッフ3名がアナウンスボランティアとして参加した。地域貢献ボランティアの一つとして、今後も継続して参加していきたい。
アナウンスボランティア：音楽芸術学科2年（1名）、コミュニケーション学科1年（1名）、国際交流学科1年（1名）

横浜マラソン 2019 ボランティア

11月10日（日）、横浜マラソンに本学の学生（9名）、留学生（9名）が競技サポートのボランティアとして参加した。本学の担当場所は、昨年同様、多くの観客とランナーが一体となる赤レンガ倉庫前であった。熱い歓声をたくさん体感することができ、良い経験となった。

スポーツは、紛争地域や被災地における復興にも大きな役割を担い、他者との相互理解を図る手段として位置づけられている。

今回、参加した学生は少し肌寒い中、お互いを思いやりながら活動をしていた。また、留学生と日本人の学生が互いの文化について紹介しあう場面が何度も見られ、良い交流となった。



演奏ボランティア

12月14日（土）に横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園のクリスマス会で、国際交流学科1年の学生スタッフ（2名）が、演奏ボランティアをした（楽器：ピアノ、ヴァイオリン）。

演奏曲：「星に願いを」「愛の夢」「アヴェ・マリア」「ひいらぎ飾ろう」「きよしこの夜」

農業プロジェクト・子ども食堂

環境及び食糧問題に関する実践を積むことを目的とし、学生たちが学内にてプランターを使用して野菜を栽培し、収穫した野菜を泉区内の認定 NPO 法人だんだんの樹が運営する「子ども食堂」への食材として提供している。また、同子ども食堂にて、学生たちが地域の子ども達に対する学習支援や調理のボランティアにも参加し、子どもたちの居場所作りの提供にもつながっている。



収穫日	収穫した野菜
6月26日(水)	茄子10個、二十日大根5本、ピーマン5個、パセリ3束、大葉5枚
7月3日(水)	茄子5個、ピーマン5個
7月17日(水)	茄子5個、ピーマン5個、オクラ5個、モロヘイヤ5束

収穫した野菜は、農業プロジェクト担当の学生スタッフが「子ども食堂」（認定 NPO 法人だんだんの樹）へお届けした。

【学生スタッフの声】

今年から子ども食堂に野菜を届けるために学内で野菜を育てるプロジェクトを開始した。同時に子ども食堂にボランティアに行っている学生もおり、料理のお手伝いや子供と遊びながら子供の居場所づくりのお手伝いをしている。野菜は茄子や二十日大根、ピーマン等を育て、自然と触れ合うこともできる。たくさんの方に携わりながら楽しく活動することが出来ており、これからも継続的に活動を行っていきたい。(国際交流学科 2年)



子ども食堂に提供された茄子とモロヘイヤ

使用済み切手・書き損じハガキ収集

ボランティアセンターでは使用済み切手、書き損じハガキなどを収集しており、本年度は、学校法人アジア学院へ寄付した。

切手の仕分けは学生スタッフが行っており、使用済み切手・書き損じハガキなどを送るこの活動は「身近にできる国際ボランティア」となっている。また、継続的な取り組みが社会への貢献につながる。宗教センター、山手事務室、教務課ほか学内の皆さまから収集のご協力を頂き、感謝申し上げたい。



使用済み切手仕分け作業

ペットボトルキャップ収集

回収したペットボトルキャップは、搬入先である「NPO 法人ともにあゆむ」を通じて、JCV（認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを日本委員会）に寄付している。

集計日	回収数	ポリオワクチン	回収重量	CO2 削減量
2019年5月25日	24,381 個	28.4 人分	56.7kg	179kg
2019年11月18日	12,427 個	14.5 人分	28.9kg	91kg
累計	36,808 個	42.9 人分	85.6kg	270kg

*2kg（860 個）でポリオワクチン 1 人分が購入できる。

（ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より 1kg=400 個より 430 個に変更された）

センターでは、通常設置している回収 BOX 以外に、大学祭で回収 BOX を特別に設置するなど、収集に努めている。日頃からこうした活動にご理解下さり、感謝申し上げたい。

第7回アフリカ開発会議（TICADVⅦ）関連イベント 神奈川県ユニセフ協会「1 day for Africa 2019 -体験発見 アフリカ大陸-」

【日時・場所】6月16日（日）10時～18時（於：横浜赤レンガ倉庫1号館）

【主催】神奈川県ユニセフ協会

【参加者】英語英米文学科2年（1名）、国際交流学科1年（6名）、国際交流学科2年（1名）、留学生（1名）、音楽芸術学科2年（1名）
計11名（学生10名、堀尾コーディネーター）

【協力】在京ザンビア大使館

「アフリカ子どもの日（6月16日）」に、アフリカの若者への理解を深めるイベントで、学生スタッフが制作した「アフリカ及び日本の格言を用いたカルタ」によるワークショップを実施した。



アフリカの格言カルタ（於：赤レンガ倉庫）

【参加学生の感想】

私達フェリス生はアフリカのことわざかるたを行い、アフリカのことわざと日本のことわざを結び付け子供たちと一緒に遊びながら文化を共有した。どのことわざを使用するのか、どのような絵にするのか、ルールはどうするのか、学生スタッフ同士で悩みながら企画を形にし、当日もたくさんの子供たちと楽しみながら運営することが出来た。

素晴らしい経験をさせて頂いた。この経験を、これからの学生生活に活かしていきたいと思う。（国際交流学科2年）

*「アフリカ子どもの日」：1976年、南アフリカのソウェトで、子どもたち数千人が通りに繰り出し、教育の質の向上と、自分たちの母国語で教育を受ける権利を主張。教育のために立ち上がったこの多くの子どもたちのことを忘れないようにするために、1991年に制定（UNICEF）。

第7回アフリカ開発会議（TICADVⅦ）関連イベント チャリティーランチ・アフリカ料理「クスクス」

目的：チャリティーランチを実施することで、学生がアフリカの食文化を体験し、またアフリカにおける課題に関する啓発となり、学生の国際問題に対する意識の向上につながる。

背景：アフリカでは、絶対貧困層の割合が高く、教育や保健衛生等の課題も多い。子どもの権利として、SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals）の諸問題解決の促進をはかる。

共催：レパスト（学食）、学食環境向上委員会（Ferris Lunch Committee）
学生スタッフがレパスト、学食環境向上委員会と一緒にメニューを考え、試食を重ねた。

寄附：1食あたり30円を、アフリカ支援に特化したNPO法人アフリカ日本協議会（AJF）へ寄付。6月17日（月）～21日（金）の5日間で3,060円（102食 × 30円）が集められ、また、有志の教員からの献金1,324円を合わせ、計4,384円を特定非営利活動法人アフリカ日本協議会（Africa Japan Forum）へ送金した。



「サマーコンサート」 ～合唱で繋がる日本とアフリカ～

8月2日（金）18時からフェリスホールにて開催された音楽学部主催のサマーコンサートに、TICADVⅦアフリカ関係者4名と共に在京南アフリカ大使館外交官・職員2名、学生スタッフ3名、堀尾コーディネーターがゲスト参加した。

映画「ライオン・キング」の挿入歌“Circle of Life”をズールー語（南アフリカの言語）で合同合唱することによって、国際文化交流をはかった。

【協力】在京南アフリカ大使館

【授業連携】第7回アフリカ開発会議（TICADⅦ）特別講演会

日時：7月8日（月）3限／場所：8206 教室・8207 教室（サテライト会場）

ゲスト：紀谷昌彦 TICAD 担当大使

テーマ：「私たちが国際協力する理由 第7回アフリカ開発会議（TICAD7）に向けて」

授業連携：「社会学概論 A」（ベンヤミン D. ミドルトン教授）

7月8日（月）、ボランティアセンターは、外務省 TICAD(アフリカ開発会議) 公式パートナー事業として、特別講演会「私たちが国際協力する理由—第7回アフリカ会議（TICAD7）にむけて—」を主催し、紀谷昌彦大使（外務省 TICAD 担当大使、元駐南スーダン大使）がご登壇された。

講演会では、①発展途上国の現状、②南スーダンの状況、③国益と世界益の3点について紹介して頂いた。①については、可視化したデータに基づき、発展途上国のデータを分析され、いかに国際協力が必要か、提示された。②については、大使が赴任された南スーダンの当時の様子（2015年4月～2017年9月）や平和構築のプロセスについて明示された。③については、国民のための国際協力、国際的な視点に焦点をあてた「地球規模の課題」に取り組む「世界益」について考察して頂いた。

講演会には、本学の学生、一般来場者、約130名が参加した。学生からは、「国際協力について意識が高くなりました」「南スーダンの現地の音楽が聴けて、アフリカを身近に感じられました」「実際に TICAD へのボランティア派遣が決まっているため、TICAD が開催される背景を知ることができ、良かったです」という意見があった。



TICADⅦ特別講演会 紀谷昌彦 TICAD 担当大使

外務省 第7回アフリカ開発会議（TICADVII）本会議 ボランティア

8月28日（水）～30日（金）にパシフィコ横浜で開催された TICADVII（第7回アフリカ開発会議）に学生（10名）がボランティアとして参加。来場者への会場案内、会議場における会場整理、運営サポート、通訳などのボランティア活動を通して、日本とアフリカとの連携、国際協力や国際関係に関する知識を補完する良い機会となった。

【参加学生の感想】

◎議員・要人班

TICADVIIに学生ボランティアとして参加した。その中でも、議員・要人班に配属され、本番を含む約一週間、外務省の皆さんと一緒に仕事をさせてもらった。行った業務は、資料作成、議員さんが控える部屋でのお手伝い、歓迎レセプションにて外務省の職員さんと二人一組になり、議員さんの補佐、などだ。とくに、本番期間は緊張する場面も多々あったが、頼れる同じ班のメンバーと、優しい職員さんと一緒に、外交の最前線に立たせてもらい、肌で外交を感じることができ、とても貴重な経験となった。（国際交流学科2年）

◎議員・要人班

TICADVIIに7日間学生ボランティアとして参加しました。今までこんなに充実した7日間はなかったのではないかと思うほど濃い日々を過ごしました。最初の4日間は会談で使われる資料や国旗などの準備。実際に会議が開催された3日間は、議員さんの控え室での応対、記者の方を会談の会場までお連れする、昼食会談の補佐などを行いました。自分一人の失敗で多くの人に迷惑をかけてしまう、日本のイメージにつながってしまう、と緊張の連続でしたが、終わった後の達成感は今でも忘れられません。（国際交流学科1年）

◎識別班

識別班は入場時に必要となるIDカードの発給・登録、コンgresバッグの受け渡し、入場ゲートのサポートを行いました。業務内容はほとんど英語で行われました。外国人の方に契約書について説明するなど、とても難しかったです。実際に自分の肌で外交の現場に触れることができ、多くのことを学ぶことができました。（国際交流学科1年）

◎サイドイベント班

展示ホールへの来場者の誘導、インフォメーションデスクでのグッズ・パンフレット配布を行いました。多様な国からの来場者との英語での意思疎通や、市民ボランティアの方々との連携など苦勞する点もありましたが、外交の現場に立ち会うことができ4日間を通して将来につながる貴重な経験になりました。（日本語日本文学科1年）

◎宿舎班

一緒に働いた外務省の職員の方々はやさしく、ボランティアの私たちのことを気にかけてくださり、とても働きやすい現場でした。仕事内容としては、各国の大統領や日本の閣僚のためのエレベーターストップ、配車手配、荷物の搬入、そしてロジの確認を主にやりました。大変だったのは、トランシーバーから入ってくる情報を聞き逃さないようにしなければならなかったことと、外務省側と大統領側の意見のすれ違いがあったとき、ボランティアの立場としてどちらに従えばよいかわからなかったことです。そして今回のボランティアを通して、自分から積極的に気づいて動くことが大切だと学びました。

(国際交流学科 1 年)

外務省 第 7 回アフリカ開発会議 (TICADVII) 公式サイドイベント 国際シンポジウム「アフリカと女性—グッドガバナンスに対する女性の役割—」

8 月 27 日 (火) 第 7 回アフリカ開発会議 (TICADVII) 公式サイドイベント国際シンポジウム「アフリカと女性—グッドガバナンスに対する女性の役割—」を主催 (於: パシフィコ横浜)。学内外から多くの出席があり (約 70 名)、学生スタッフ (3 名) が運営ボランティアとして参加した。

登壇者によって、アフリカにおける女性の権利や、日本政府が提唱する「すべての女性が輝く社会づくり」の実現に向けた日本及びアフリカの展望について議論した。また人間の安全保障に対し、女性が重要な役割を担っていることが再考された。本シンポジウムでは登壇者のみではなく、紫綬褒章を受賞された東京大学名誉教授の河口洋一郎氏、パルクラブ参与の瀬藤澄彦氏、日本国内で初のアフリカ人学長となった京都精華大学学長のウスビ・サコ氏 (Prof. Oussouby Sacko) や NHK 解説委員の出川展恒氏等が出席され、フロアからの議論も充実した内容となった。

日時: 2019 年 8 月 27 日 (火) 18 時~19 時半 / 場所: 展示ホール B01 会場

主催: フェリス女学院大学ボランティアセンター

後援: 一般財団法人アフリカ協会

テーマ: 「アフリカと女性—グッドガバナンスに対する女性の役割—」

パネリスト: Dr. Lia Tadesse, State Minister for Health, Ethiopia

横関祐見子氏 (UNESCO-IICBA 所長)

広瀬晴子氏 (元モロッコ大使)

池亀美枝子氏 (AU-NEPAD 開発機構総裁特別顧問)

アフリカの人道危機—ボイス・オブ・アフリカ 写真展・講演会

概要：日本赤十字社による写真展を開催。海外の著名な写真家がアフリカにおける各難民キャンプにて撮影した写真を通して、学生が難民の現状、課題について学んだ。また、合わせて日本赤十字社職員による講演会を開催し、国際機関で活躍する職員の話を聞くことで、学生達の難民に関する知識を補完した。

目的：写真展の開催によって学生がアフリカにおける難民の現状について、食糧問題、環境問題、人道支援等の観点から学び、国際社会で活躍する人材として学生を育成。

【写真展】

日時：2019年12月16日（月）～12月20日（金）

場所：ボランティアセンター、附属図書館、国際交流学部共同研究室

共催：日本赤十字社

【講演会】

日時：2019年12月17日（火）12：20～13：00

場所：キダーホール

講演者：日本赤十字社 事業局 国際部 斎藤之弥参事

講演の内容：現地（アフリカ）の現状について、日本赤十字社による国内外の活動について

【参加学生の声】

- ・遠いアフリカの様子を知ることができた。
- ・難民の生活がどれだけ大変なのか考えるきっかけとなった。
- ・日本赤十字社による人道支援の話を聞き、将来自分も人のために役立ちたいと思った。
- ・実際にアフリカを訪れ、生のアフリカの声を聴きたい。
- ・アフリカの子ども達のために何かしたい。
- ・今の自分の環境が恵まれていると知り、勉強を頑張ろうと思った。
- ・日本赤十字社と一緒にプロジェクトを作りたい。



防災シンポジウム「減災教育のあり方と大学の役割～子どもから高齢者まで誰一人取り残さない～」

2019年12月16日、当センターは、防災シンポジウム「減災教育のあり方と大学の役割～子どもから高齢者まで誰一人取り残さない～」を主催し、災害時にいかにして社会的弱者層といわれている人々が減災することが可能か、学際的な見地から議論した。

また、本学の教育理念「For Others」を念頭に置きながら、他者との協働について考察した。

国際機関にて提唱された SDGs では、「人間中心 (people-centered)」「誰一人取り残さない (no one will be left behind)」としており、日本が重視する人間の安全保障の理念が反映された他、グローバル・パートナーシップ、女性・保健・教育・質の高い成長等のみではなく、防災も重要な課題としている。本シンポジウムでは、「兵庫県枠組み (HFA)」から「仙台防災枠組み (2015-2030)」の変遷について知識及び見地を深め、また、横浜市の震災の歴史を事例とし、防災及び減災に関する取り組みについて考えた。

災害時により弱い立場となる恐れがある母子や高齢者、過疎地域の住民等に対する防災に関する取り組みについて問題提議する。災害によって、現地の伝統文化や地域のコミュニティーが崩壊する。いかにして、伝統文化を含めた復興支援が可能か、合わせて再考した。

プログラム

第1部 2019年12月16日(月)3限 基調講演会

講演者：大西比呂志 国際交流学部教授(場所：8205 教室/8号館2階)

題「横浜と関東大震災～フェリス女学院150年史資料『関東大震災・女学生の記録』から」
(ベンヤミン・ミドルトン教授との授業連携)

第2部 2019年12月16日(月)4限 パネルディスカッション(場所：グリーンホール)

モデレーター：ベンヤミン・ミドルトン国際交流学部教授

パネリスト：

及川幸彦主幹研究員(東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター)

題「東日本大震災からの教育の再生と復興—仙台行動枠組みとSDGsを踏まえて」

江原 顕 氏(横浜市健康福祉局地域福祉保健部福祉保健課担当課長)

題「横浜市の災害時要援護者支援」

松岡広路教授(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

題「被災地に寄り添った防災・減災教育—相互交流による生きた学び」

(上原良子教授との授業連携)

【参加学生のアンケートより】

- ・東日本大震災以来、自宅での防災装備をしっかりと行うようになりましたが、震災の経験を活かし、台風などへの備えもするようになりました。
- ・非常時には近隣住民とお互いに助け合えるよう（共助）、良好な関係を築いている。
- ・近年、自然災害が増えて、様々な対策が必要になっており、国や自治体の臨機応変な対応はもちろん（公助）、各家庭の対応も今後、求められていると思う（自助）。
- ・阪神大震災の後、ボランティア活動が推進されたことを知った。神戸市のように、学生主体で活動していく機会が増えていくと良いと思う。
- ・東日本大震災で3つの偏見があったそうですが、「正常化のバイアス」（普段なら大丈夫だろう）、「同調性のバイアス」（みんなと一緒にだから大丈夫だろう）は気を付けなければと思うが、「愛他行動」に関しては For Othersに通じるものがあると思った。
- ・「災害時要支援者支援」という言葉に、障がい者が災害時に支援されることだけでなく、自分たちが災害時に怪我をした場合も含まれることを初めて知った。個人情報の問題もあるが、要支援者の名簿を共有することが災害時に役立つことを学んだ。
- ・防災教育と減災教育を通じて、持続可能な未来を作ることを目標にしなければならぬと強く感じた。



写真：左から松岡広路教授、江原顕氏、
及川幸彦主幹研究員。



写真：シンポジウムにおける全体の様子

学生スタッフ研修会

第1回研修会

緑園キャンパスにて、「2019年度第1回学生スタッフ研修会」を実施した。テーマは「ボランティア」とし、ボランティアを始める際に必要なボランティアに関する基礎知識や理論について学んだ。

ボランティアセンターの役割、学生スタッフの役割と活動について確認をした。また、当センターで栽培し、収穫した野菜を子ども食堂に提供することを目的とし、野菜の苗を植えた。

日時：5月18日（土）10時～14時半（於：緑園キャンパス 2301 教室）

研修会のテーマ：「ボランティアとは」、農業プロジェクト

参加学生数：新学生スタッフ（11名）、学生コーディネーター（3名）、
植栽担当職員（1名）（計15名）

スケジュール	
午前	ボランティアについてワークショップ「ボランティアとは」 ボランティアセンターの役割、学生スタッフの役割について（担当決め）
午後	農業プロジェクト（茄子、ピーマン、パセリ、二十日大根などの栽培）



新学生スタッフ・新学生コーディネーター委嘱式

6月13日（木）ウェルカムセンターにて学生スタッフ及び学生コーディネーターに対する本年度の委嘱式を実施した。その後、センター長、及び学生スタッフ及び学生コーディネーターと称される2年生以上の学生スタッフとの交流会を催した。



委嘱式の様子（於：ウェルカムセンター）

第2回研修会

第2回研修会は3回に分けて実施。1日目は東京臨海広域防災公園（そなエリア東京）を見学。2日目は防災に関する知識を共有し、救命救急講習を実施。また、大学祭でのボランティアセンターの展示内容、ボランティアセンター主催の説明会など、後期の活動内容について議論し、今後の展開について見直しを行った。3日目は横浜市内の他大学のボランティアセンター学生スタッフが来訪し、各大学の活動を紹介したり、ワークショップを通して、交流をした。

2019年9月8日（日）10時～16時／場所：東京臨海広域防災公園（そなエリア東京）

参加者：学生スタッフ3名

2019年9月21日（土）10時～14時（於：緑園キャンパス 2403 教室）

参加者：学生スタッフ（9名）

午前：救命入門コース受講（泉消防署の方から）

午後：東京臨海広域防災公園（そなエリア東京）訪問報告、TICAD ボランティア報告、大学祭について、ボランティアセンター後期スケジュールについて



写真：救命入門コース受講時の様子

2019年9月28日（土）10時～13時（於：緑園キャンパス 2403 教室）

参加者：横浜市立大学ボランティア支援室 学生スタッフ（3名）、コーディネーター（1名）
神奈川大学教育支援センター 学生スタッフ（9名）、教員（1名）
フェリス女学院大学ボランティアセンター 学生スタッフ（7名）、
コーディネーター（1名）、職員（1名）（計23名）

プログラム：各大学ボランティアセンターの活動紹介、ワークショップ



写真：他大学ボランティアセンターとの交流会の様子

【企画学生の声】

今回のこの交流会はたくさんの人たちに助けられ、協力があったからこそ大成功に終わったと思う。準備期間が沢山あったとは言えない中で PowerPoint を作って下さった先輩や、一緒に WS を考えて形にしてくれた後輩たち、企画を一緒に練ってくれた同級生に本当に助けられた。また、当日も神奈川大学・横浜市立大学の学生スタッフの皆さんの協力もあり、ほぼ定刻通り進むことが出来たことから、人と人との関わりの大切さが実感できた研修会であった。今回の研修会で得た沢山の学びをこれからの大学生活に活かしていきたい。(国際交流学科 2 年)

第 3 回研修会 —研修旅行 in 岐阜—

杉原千畝の軌跡を辿って

第 2 次大戦中にナチス・ドイツから逃れた多数のユダヤ人を「命のビザ」で救った杉原千畝がビザを発給してから今年で 80 年となる。学生スタッフ研修旅行ではその杉原氏の軌跡をたどり、人権の尊さについて学ぶ予定であったが、新型コロナウイルス対策のため、中止した。

<中止>

実施日：2020 年 3 月 27 日（金）～29 日（日）2 泊 3 日

訪問先：杉原千畝資料館、岐阜城天守閣、犬山城、博物館明治村など

大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー2020

各大学のボランティアセンターに所属する学生スタッフリーダーを対象とした研修会が実施され、当センターから学生スタッフ（国際交流学科1年・4名）が参加した。

「新年度に向けて、より良い組織作りを考え、他大学から学ぼう」をテーマとして実施され、学生スタッフのリーダーの目的や各ボランティアセンターの課題や課題解決等について、ワークショップをとおして議論し、体験した。

プログラム

日程：2020年2月12日（水）～13日（木）

場所：大阪市立青少年文化創造ステーション KOKOPLAZA

主催：特定非営利活動法人ユースビジョン

【参加学生スタッフより】

・講義から、組織内でのコミュニケーション・マネジメントの重要性を学んだ。その過程から、組織の定義なども学び、組織の統合は、メンバーそれぞれの目標と組織の目的を明確化し、コンセンサスによって活動内容を集団決定することが重要だと学んだ。

グループワークでは、メンバー全員が偏りなく発言できる場の重要性を実感することが出来た。また、コンセンサスによる集団決定を実践したことで、数で決まる多数決とは違い、それぞれの意見に関して、その背景や捉えている定義の違いを考慮して考えることが出来、賛成反対に関わらず、問題に対して考える良い機会になると感じた。

セミナー全体を通して、フェリスボランティアセンターの問題を明確化出来たので、ミーティングの開催を増やすことや、登録制度の見直しなど、セミナーで学んだことを落とし込み、改善に努めていきたいと思う。（国際交流学科1年）

・私が、他大学のボランティアセンターの学生たちとの交流やセミナーに参加して感じたのは、ミーティングに参加する学生の少なさ、積極的な学生が少ないこと、これらに伴う情報共有の不足であった。

昨年度のミーティングはおよそ月に一度昼休みのタイミングで行われていたがミーティングに参加する人数がとても少なく、話し合った結果をインターネット上で共有する形を取っていたが共有されたものに目を通していた学生も少なかったのではないかと感じる。来年度以降、ミーティングの議題について運営していく上で話し合わなくてはならないこと以外にも、学生スタッフが自ら議題を持ち込むことができるような話しやすい雰囲気を作ることでミーティングをより濃いものになり、参加する学生が増えることにも繋がるのではないかと感じた。（国際交流学科1年）

大学祭

活動展示「テーマ：防災、農業プロジェクト等ボラセンプロジェクト紹介」

2019年11月3日から4日まで緑園キャンパスにて大学祭が開催され、ボランティアセンターではプロジェクト紹介の展示やワークショップを実施した。

プロジェクト紹介では、アンネバラ、ふれあい学習サポート、緑園新春コンサート、農業プロジェクト等のパネル展示を実施し、来場者の方々に対し、学生スタッフが当センターの各プロジェクトの概要や内容、現地の様子について紹介させて頂き、地域の方々に活動を深く知って頂く良い機会となった。

展示のほか、新聞紙で非常用スリッパを作る防災ワークショップ、アフリカの文化体験を目的とした「アフリカの布で制作する『くるみボタン作り』」、「アフリカの格言カルタ」のワークショップを実施した。

■展示

- ・ ボランティアセンターの活動紹介（パネル）
アンネのバラ、緑園東小学校ふれあい学習サポート、緑園新春コンサート、防災、TICAD、農業プロジェクト
- ・ ニュースレター（学生スタッフが編集・発行）
- ・ ボランティアセンターの年間活動報告書

■ビデオ上映

- ・ 学生スタッフが撮影・編集したビデオを上映した。
- ・ ボランティアセンター活動紹介



写真：毎年子ども達に大好評なアフリカの布を使用した「くるみボタン作り」の様子

Ⅲ ボランティアセンター資料

○ボランティアセンター規程

2003年1月23日制定

2007年1月25日改正

2015年3月12日改正

2007年5月17日改正

2016年3月24日改正

(設置)

第1条 フェリス女学院大学学則(1965年4月1日制定)第42条の2の規定に基づき、フェリス女学院大学(以下「本学」という。)にボランティアセンター(以下「センター」という。)を置く。

(趣旨)

第2条 この規程は、センターの組織運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第3条 センターは、本学の教育理念である“**For Others**”の精神のもと、次に掲げるボランティア活動に係る諸事業の推進に当たることを目的とする。

- (1) 学生のボランティア活動に係る情報の収集・提供、参加機会の紹介に関する事項
- (2) 学生のボランティア活動事業の企画・立案に関する事項
- (3) 学内のボランティア団体への支援に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に必要な業務に関する事項

(センターの施設)

第4条 センターは、緑園キャンパスに置く。

(センターの構成)

第5条 センターには、センター長、ボランティアコーディネーター(以下「コーディネーター」という。)、センター職員及び学生スタッフを置く。

(センター長)

第6条 センター長は、センターを代表し、その運営等を統括する。

- 2 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 3 センター長は、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

(コーディネーター)

第7条 コーディネーターは、センター長を補佐し、センター業務を行う。

- 2 コーディネーターは、事務嘱託1名とし、ボランティア活動に経験と見識を有する者をもって充てる。
- 3 コーディネーターは、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

(センター職員)

第8条 センター職員は、センター長及びコーディネーターの指示のもと、センター業務を行う。

- 2 センターは、必要により臨時職員を、センター職員として置くことができる。

(学生スタッフ)

第9条 センターは、センター業務の運営に当たり、学生の参加と協力を求めることができる。

2 学生スタッフは若干名とし、公募に応募した本学学生の中からセンター長が委嘱する。

3 学生スタッフの活動期間は原則1年とし、再任を妨げない。

(委員会)

第10条 センターの運営に関する諸事項を審議するため、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

2 委員会に関する事項は、別に定める。

(その他の事項)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第12条 センターに関わる事務は、コーディネーター及びセンター職員が行う。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2003年3月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年5月17日から施行し、2007年4月1日から適用する。

附 則

1 この規程は、2015年4月1日から施行する。

2 改正前の第4条関係委員会に関する事項は、ボランティアセンター運営委員会規程で別に定める。

附 則

この規程は、2016年4月1日から施行する。

○ボランティアセンター運営委員会規程

2015年3月11日制定

2017年3月10日改正

(趣旨)

第1条 この規程は、ボランティアセンター規程(2003年1月23日制定)第10条の規定に基づき、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という。)の構成、運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

(委員会の構成)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) ボランティアセンター長(以下「センター長」という。)
- (2) 各学部から選出された教員 各1名
- (3) 教務部長
- (4) 学生部長
- (5) 国際部長
- (6) 宗教主事
- (7) 大学事務部長
- (8) その他委員会が必要と認めた者

2 委員の任期は、前項第1号及び第3号から第7条までに掲げる委員についてはその職に在任する期間、同項第2号に掲げる委員については2年、第8号に掲げる委員については1年とし、再任を妨げない。

(審議事項)

第3条 委員会は、ボランティアセンター(以下「センター」という。)の運営に関し、次に掲げる事項を審議するものとする。

- (1) センターの運営方針に関する事項
- (2) センターの事業計画及び管理運営に関する事項
- (3) センターの日常業務の指針に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に関する重要事項及び必要と認められる事項

(運営)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長がこれに当たる。

- 2 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。
- 3 委員会は、定例委員会及び臨時委員会とし、定例委員会は原則として毎年度1回開催するほか、臨時委員会は、必要あると認めたときに随時招集する。
- 4 委員会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。

(議決の方法)

第5条 委員会の議決は出席者の過半数をもって決定し、可否同数のときは議長がこれを決する。

(記録)

第6条 委員会の議事については、議事録を作成し、センターがこれを保管する。

(報告)

第7条 委員長は、委員会の協議の結果を学長及び大学評議会に報告するものとする。

(その他の事項)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が決定する。

(庶務)

第9条 委員会に関わる事務は、ボランティアコーディネーターが行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2017年4月1日から施行する。

ボランティアセンター運営方針

“For Others”の精神のもとで「新しい時代を切り拓く女性」を育成することは、フェリスの教育目標の一つです。しかしそのためには、授業を受けて試験やレポートでよい点をとるだけでは足りません。むしろ学生たちが、自分から社会に出て行って問題を発見し、その解決のための理念と計画を立て、他の人々と協力しながら行動してゆく能力を養う必要があります。ボランティアセンターは、こうした視点に立って、これまでは学生個人の自主性に委ねられてきたボランティア活動を、大学として積極的にサポートすることを目標としています。これと連動して、2003年度から「ボランティア活動1，2，3」が単位化されました。

1. センターは、ボランティア活動を通して、学生と大学、社会（国内と国外）をつなぐ役割を目指します。
2. センターは、学生が希望する活動領域で、信頼できる活動場所を紹介できるよう、コーディネーターの指導のもとで情報の収集と調査を行います。さらにボランティアに関連する領域を扱う教員、地域の社会福祉協議会や他大学のボランティアセンターとの交流を積極的に進め、ネットワーク化を促進します。
3. センターは、センターを訪ねる学生たちの自主性を重視し、活動場所とのマッチングに配慮します。また大学と学生が、“For Others”の精神のもとで目的を共有する対等な人間であることを自覚し、学生たちと対話し、問合せや相談に対応します。またモニタリングを行うことで活動中の学生たちを支援し、活動状況を知ることと並んで、活動先で得られた貴重な経験の共有化に努めます。活動が終了した後は、学生自身による自己評価を促し、場合によっては成果を社会に還元するための活動を行います。
4. センターは、学生参画型の運営を目指します。とくに学生スタッフの募集と育成に努めます。学生の企画立案によるボランティア事業を支援するために、情報と場所を提供します。
5. センターは、学内のボランティア団体を支援します。各団体の目的と活動趣旨を理解し、ニーズを知るために話合いの場を設け、可能な支援について検討します。
6. センターは、写真展・講演会・ワークショップなどの催しと並んで、Newsletterの発行、ホームページの作成などによる広報活動を積極的に行います。

センターは、以上のような活動を通して、学生たちが、自分を含む人間や自然の「根源的な尊厳」に対する感性を養い、現代社会の抱える諸問題について「実践的な知性」を育み、そして社会における「市民参画型」の合意形成を促進するためのコミュニケーション能力を身につけてくれることを、場合によっては卒業後の進路につながってゆくことを、また大学が、社会的な貢献度と知名度を高めてゆくことを目指します。

(2003年4月確定)

(2017年5月24日一部改訂)

アンケート結果（ボランティアセンター来訪者）

2019年度、ボランティアセンターに足を運び、情報収集や相談を行った学生総数（実数）は84名となった。ボランティアセンターでは、初回来訪時に相談票に記入をしてもらい、聞き取りを行い、相談内容を記録している。以下のグラフは相談票に基づいて集計している。

図1 ボランティアセンター訪問者数（学科別）

単位：人

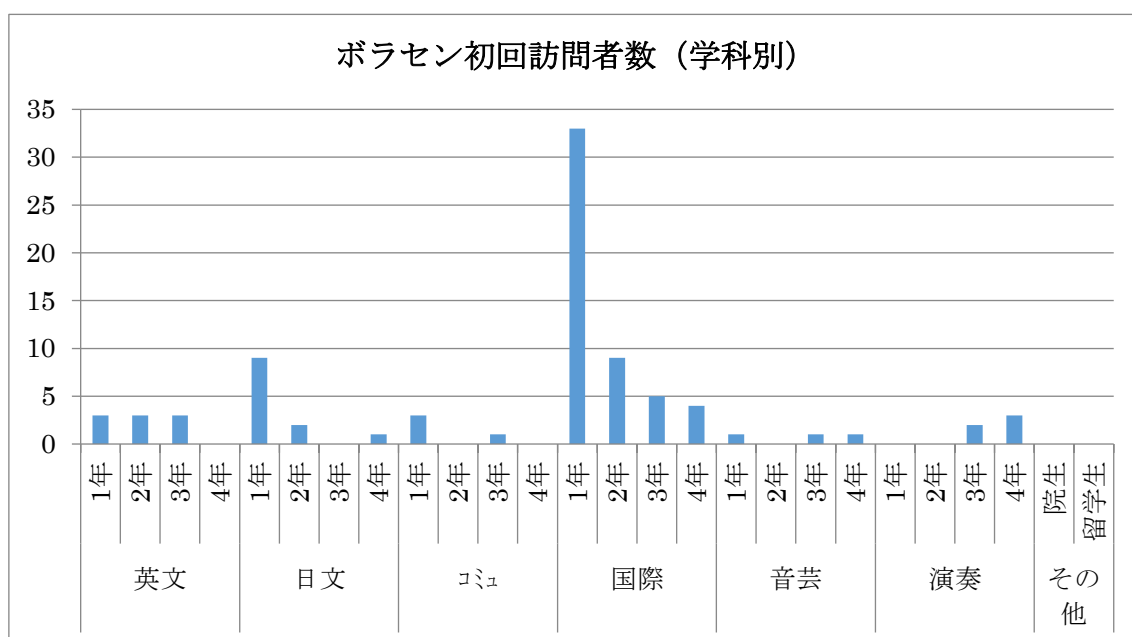
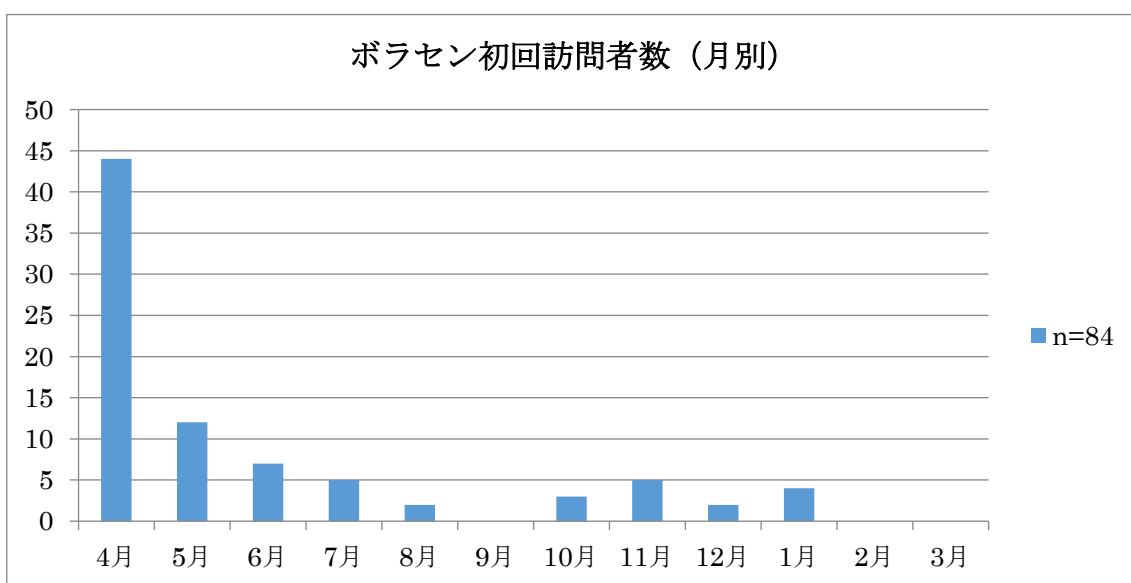


図2 ボランティアセンター訪問者数（月別）

単位：人



今年度の学科別来訪者数の傾向は、国際交流学部が全体の約 60%（前年度は 45%）、文学部が 30%（前年度 28%）、音楽学部が 10%（前年度は 17%）と、国際交流学部生の来訪が多かった。今年も演奏ボランティアに関心を持つ学生が多く、文化・まちづくりに関心を持つ学生も多い傾向にあった。

月別数では、4月～6月・10月～11月の数が多くなっていることが特徴である。夏休みや春休みに行われるインターンシッププログラム、海外ボランティアなどに参加するため、来訪者が増えたといえる。

関心のある分野については、例年と大きな変化はなく、国際協力、国際交流、教育への関心が高い傾向にあった。

図3 関心のある分野について

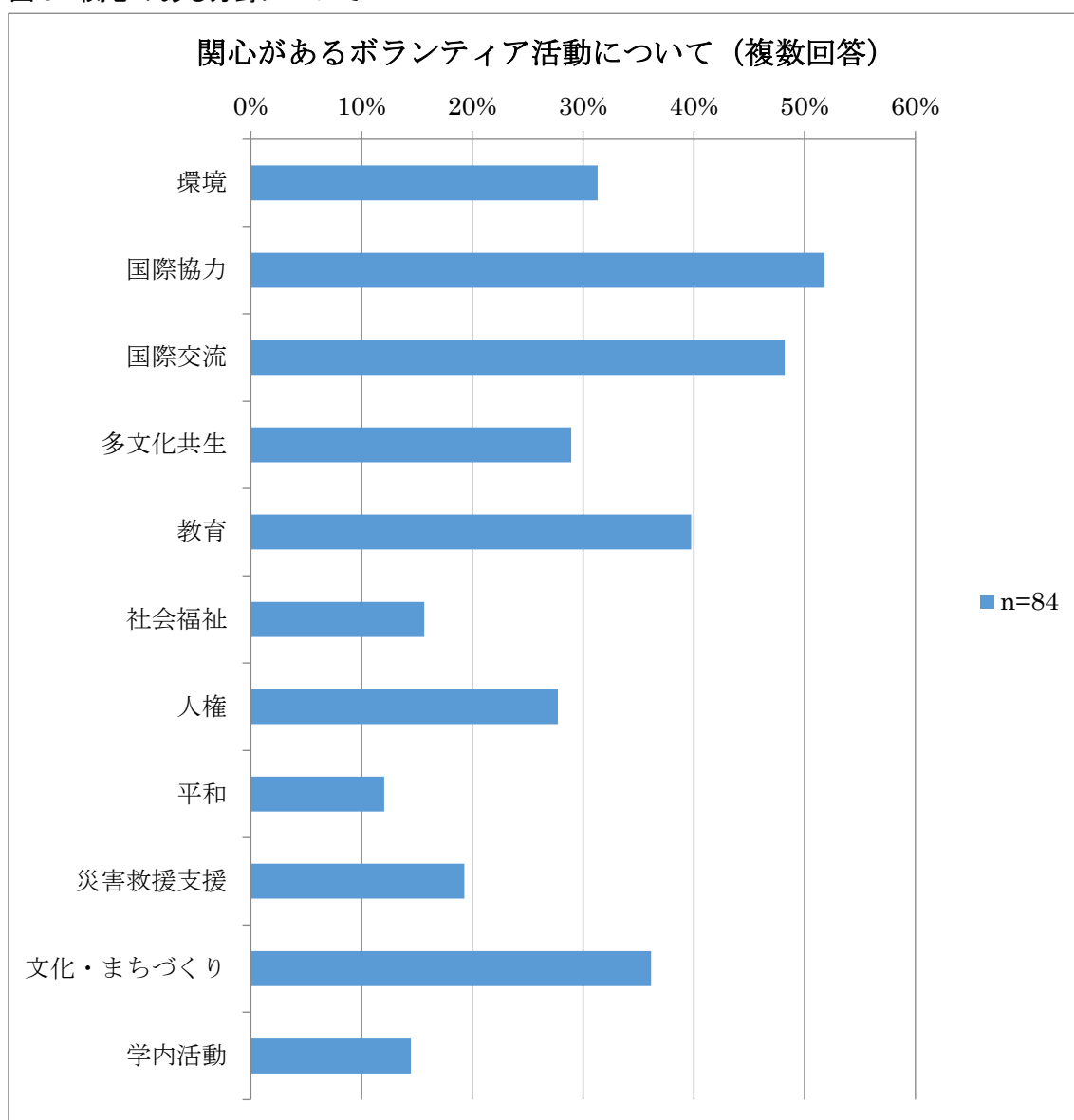


図4 国際協力分野の内訳（複数回答）

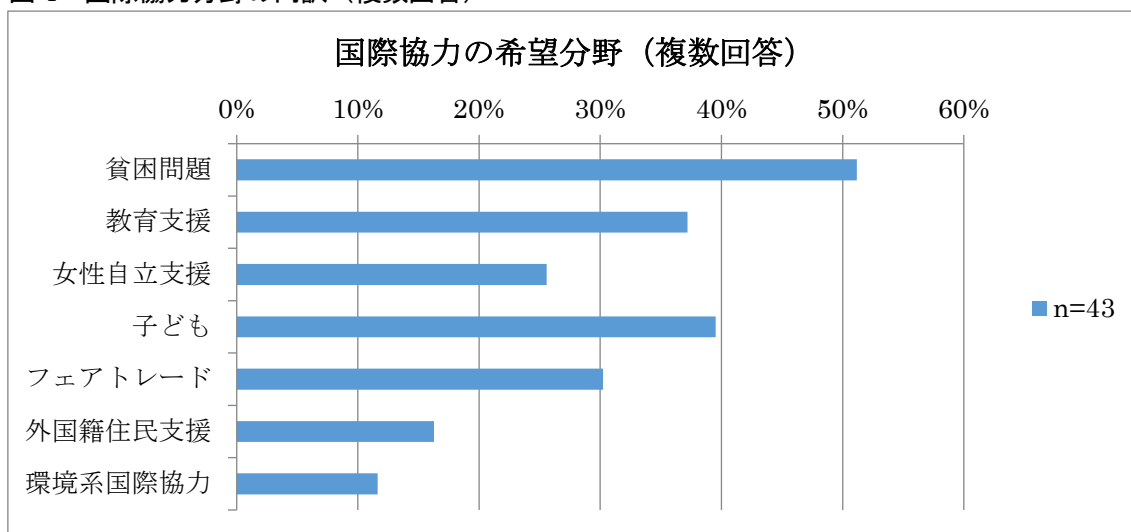


図5 国際交流の内訳（複数回答）

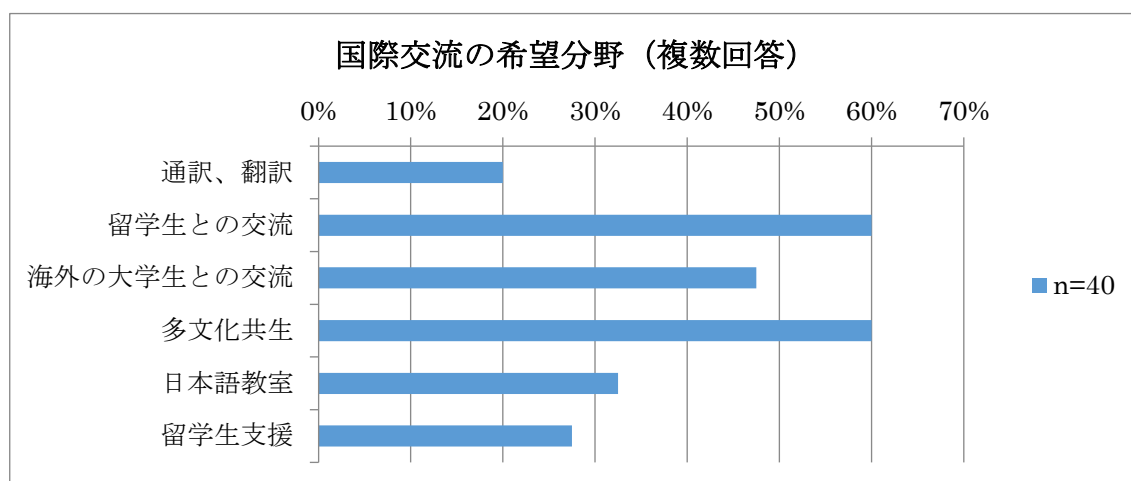
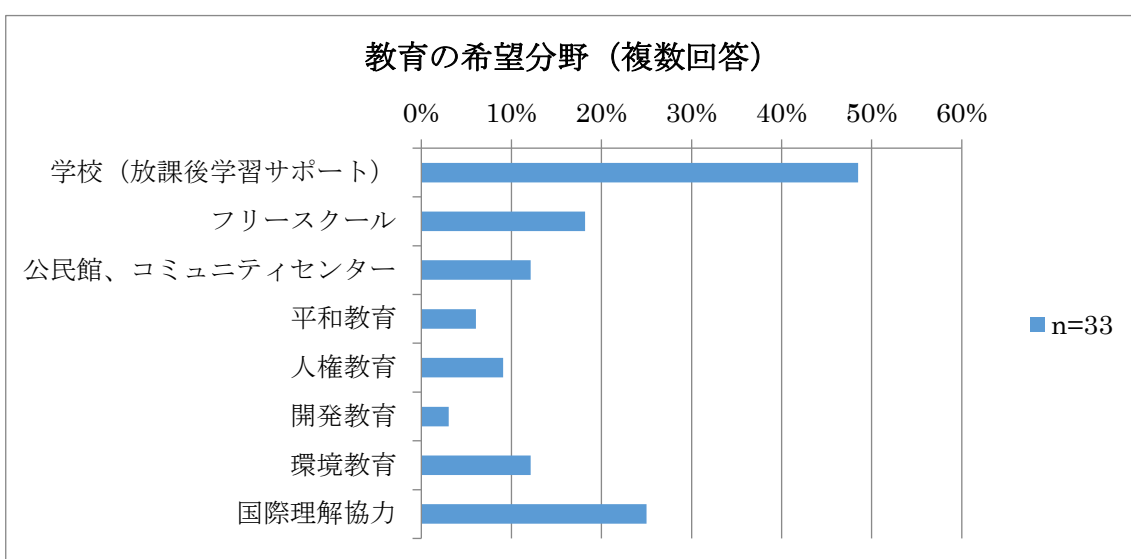


図6 教育分野の内訳（複数回答）



2019年度ボランティア説明会 実施報告

春のボランティア説明会

第1回 4月2日(火) 16時～16時半@キダーホール 参加者数70名、アンケート回収数54

第2回 4月3日(水) 11時～11時半@グリーンホール 参加者数65名、アンケート回収数58

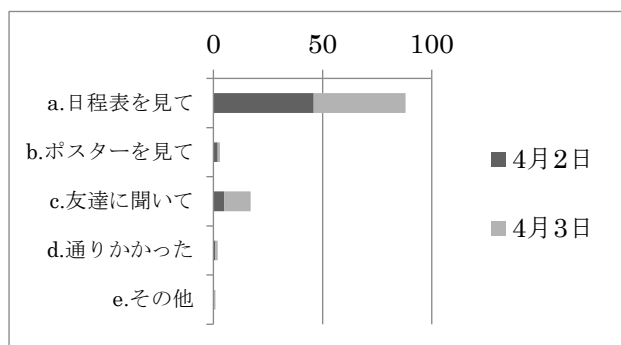
今年度も、バリアフリー推進室と合同で行った。説明会全体を通して、ノートテイクを行った。

秋のボランティア講習会

10月9日(水) 12:20～13:00@キダーホール 参加者数35名、アンケート回収数5

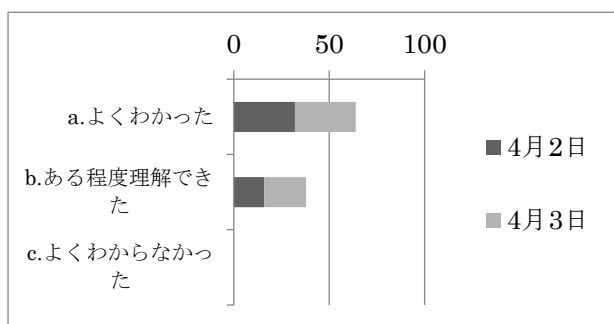
実施日	学年	英文	日文	コミュ	国際	演奏	音芸	記入計	無記入	回収数計
4月2日	1年	1	12	14	25	0	0	52	0	54
	2年	0	0	0	1	0	0	1		
	3年	0	1	0	0	0	0	1		
	4年	0	0	0	0	0	0	0		
4月3日	1年	11	7	9	28	0	1	56	1	58
	2年	0	0	0	0	0	0	0		
	3年	0	0	0	1	0	0	1		
	4年	0	0	0	0	0	0	0		
10月9日	1年	0	0	1	0	0	0	1	0	5
	2年	1	1	0	1	0	0	3		
	3年	0	0	0	0	0	1	1		
	4年	0	0	0	0	0	0	0		
合計		13	21	24	56	0	2	116	1	117

1. 今日の説明会はどのように知りましたか？

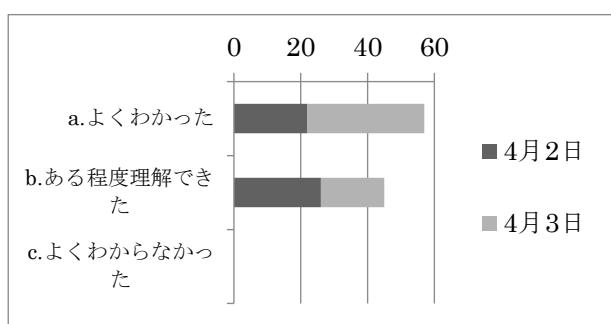


2. 今日の説明会に参加して、理解できましたか？

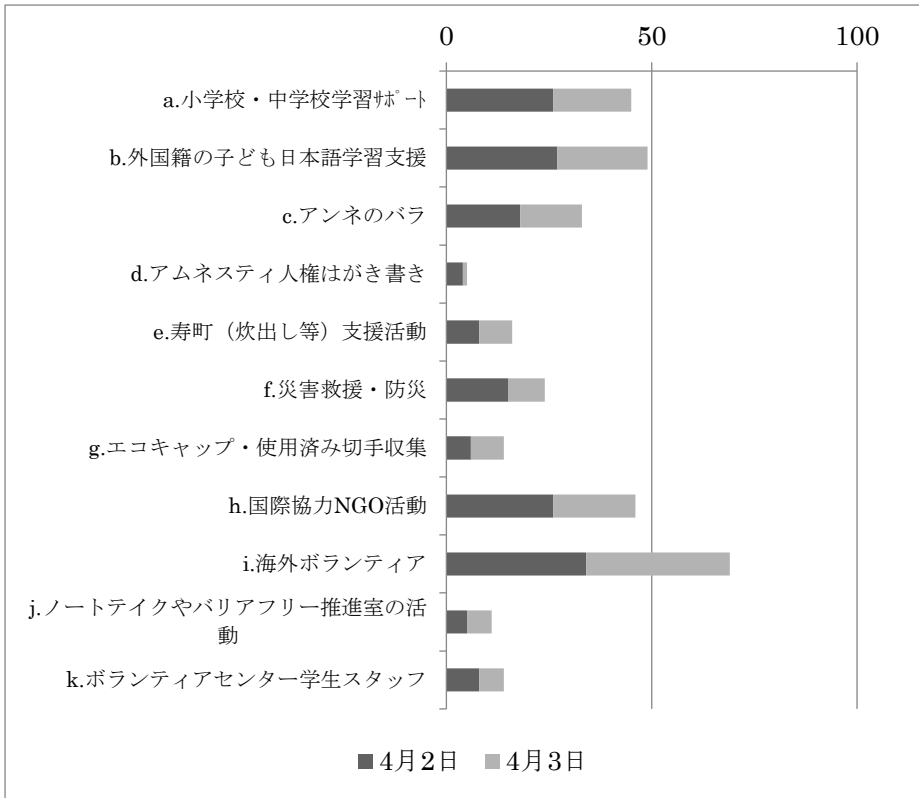
【ボランティアとは？】



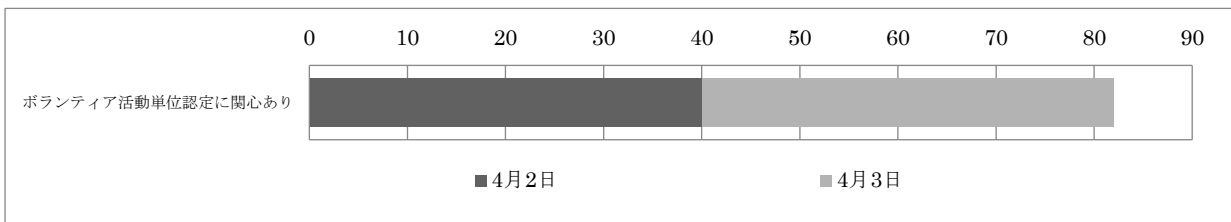
【ボランティアセンターについて】



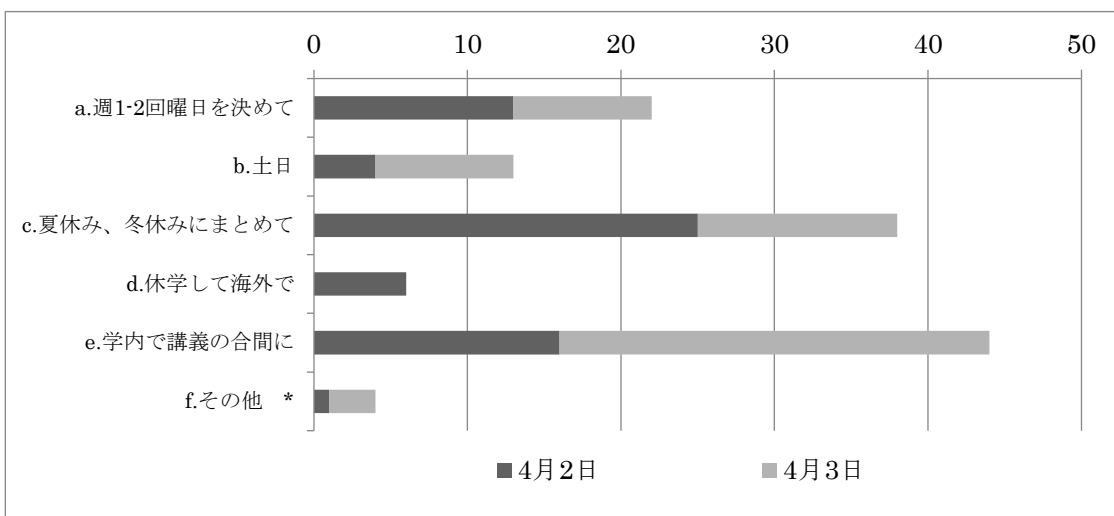
3. 紹介されたプロジェクトに興味を持った活動、参加してみたい活動はありますか？（複数回答可）



4. ボランティア活動の単位認定について、関心はありますか？



5. いつボランティア活動をしたいですか？



2019 年度ボランティアセンター活動実績

- 4月2日(火) 第1回ボランティアセンター説明会(バリアフリー推進室合同)
- 4月3日(水) 第2回ボランティアセンター説明会(バリアフリー推進室合同)
- 4月8日(月)～12日(金) ボランチ(ボラセン de ランチ)
- 4月17日(水) 緑園東小ふれあい学習サポート・上白根中学校 AT 説明会
- 4月17日(水) 授業「ボランティア論」学生コーディネーター ゲスト参加
- 4月24日(水) NPO インターンシッププログラム説明会
- 4月26日(金) 新ボラセン学生スタッフ顔合わせ会
- 5月8日(水) 夏期国際機関実務体験プログラム説明会
- 5月13日(月) CIEE(国際教育交換協議会) 海外ボランティア説明会
- 5月18日(土) 第1回学生スタッフ研修会(緑園キャンパス)
- 5月22日(水) 第1回ボランティアセンター運営委員会
- 5月25日(土) ふれあい“ザ”いずみ軽スポーツ大会 司会ボランティア参加
- 6月3日(月)～7月31日(水) エッセイ作品「平和への願い」(ボランティアセンター)
アンネ・フランク生誕90年企画展『アンネ・フランクと希望のバラ』(図書館と連携)
- 6月12日(水) アンネのバラ礼拝
- 6月13日(木) 新学生スタッフ・学生コーディネーター委嘱式
- 6月16日(日) 1day for Africa(神奈川県ユニセフ協会主催) ボランティア参加
- 6月17日(月)～21日(金) TICADVII(第7回アフリカ開発会議) チャリティーランチ
- 6月26日(水) ボランティア活動科目履修相談会
- 7月8日(月) 3限 第7回アフリカ開発会議(TICADVII) 特別講演会
- 8月2日(金) サマーコンサート ゲスト参加(TICADVII関連) 音楽学部主催
- 8月5日(月) 第2回(持ち回り) ボランティアセンター運営委員会
- 8月27日(火) TICADVIIサイドイベント 国際シンポジウム主催 @パシフィコ横浜
- 8月28日(水)～30日(金) TICADVII(第7回アフリカ会議) ボランティア参加
- 9月8日(日) そなエリア東京(防災体験学習施設) 見学
- 9月13日(金) 夏期国際機関実務体験プログラム最終報告会
- 9月21日(土) 第2回学生スタッフ研修会(防災について、救急救命講習)
- 9月28日(土) 他大学ボランティアセンター交流会
(横浜市立大学ボランティア支援室、神奈川大学教育支援センター)

- 10月7日(月) 春期国際機関実務体験プログラム説明会
10月9日(水) 秋のボランティアセンター説明会
10月9日(水) 授業「ボランティア論」学生スタッフ ゲスト参加
10月12日(土)～13日(日) 横濱ジャズプロムナード2019
ボランティア参加 →台風により中止
10月23日(水) 第3回ボランティアセンター運営委員会
10月30日(水) 第4回(持ち回り)ボランティアセンター運営委員会
- 11月3日(日)～4日(月) 大学祭 展示参加
11月10日(日) 横浜マラソン2019 ボランティア参加
11月13日(水) アンネのバラ植樹記念礼拝
11月18日(月) 3限 アンネ・フランク生誕90周年記念講演会
11月27日(水) CIEE 海外ボランティア説明会
- 12月5日(木) 第5回(持ち回り)ボランティアセンター運営委員会
12月14日(土) 演奏ボランティア(クリスマス会@横須賀市内幼稚園)
12月16日(月) 3限、4限 防災シンポジウム
12月16日(月)～20日(金) 写真展「アフリカの人道危機～ボイス・オブ・アフリカ～」
12月17日(火) 講演会(日本赤十字社)
- 2020年
- 1月11日(土) 第17回緑園新春コンサート
1月22日(水) 第6回ボランティアセンター運営委員会
2月12日(水)～13日(木) 大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー
2月25日(火) 動画編集ソフト操作講習会(基本編)
3月27日(金)～29日(日) 学生スタッフ研修旅行(岐阜県) →中止

おわりに

堀尾藍コーディネーター

当センターでは 2003 年の設立以来、地域との連携を重視しており、地域の課題解決につながる各プロジェクトの企画・運営を学生スタッフが中心となって実施している。また、グローバルな人材の育成として、国際協力や国際交流の分野においても学生ボランティアを派遣している。

ボランティアセンターでは、単に学生をボランティア派遣するのみではなく、なぜ課題が存在するか、第一線でご活躍されている有識者をお招きして、シンポジウムや講演会を実施している。なぜなら大学は教育機関であり、次世代の育成にも力を入れる責務があると考えます。

当センターでは、様々な分野に関するプロジェクトを実施している。「アンネのバラプロジェクト」「ふれあい学習プロジェクト」「子ども食堂」「被災地支援プロジェクト」「緑園新春コンサートプロジェクト」「演奏ボランティアプロジェクト」「多文化共生プロジェクト」「寿町（炊き出し）支援プロジェクト」がある。学生は授業にて様々な分野について学び、当センターによるボランティア活動をとおして、社会における課題設定や課題解決について如何にして取り組むか、考えるきっかけになる。

今年度、授業にてフードバンクについて学んだ学生スタッフから「食に関する」企画書が提出された。これまで、緑園新春コンサートを共催してきた認定 NPO 法人だんだんの樹が新しく「子ども食堂」を開始され、新規プロジェクトとして、学生をボランティアとして派遣した。介護施設が運営する子ども食堂では、高齢者と子ども達の出会いの場とし、そこへ学生がボランティアとして参画することによって、核社会化している日本社会にて幅広い年齢層との関わり、お互いの年代だからこそある課題を認識し、循環型社会の「深い関わりあい」がみられた。

一方では、COVID-19 の影響で、当センター主催の「学生スタッフ研修旅行（岐阜）」が中止となり、初めて感染症と直面をし、学生の安全保障の観点から、現地でのボランティア活動からオンラインボランティアへの対応を要している。

COVID-19 の影響で亡くなられた方々には哀悼の意を表すると共に、今後の当センターの活動として、大きな分岐点ともなる。

今年度も多くの関係者の皆さまにご指導、ご鞭撻を賜りましたことを、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

2020 年 3 月

2019年度 ボランティアセンター年間活動報告書 2020年3月31日発行

発行・編集／フェリス女学院大学 ボランティアセンター

〒245-8650 横浜市泉区緑園4-5-3 CLA棟2F



フェリス女学院大学ボランティアセンター

緑園キャンパス CLA 棟 2 階
〒245-8650
横浜市泉区緑園 4-5-3



TEL: 045-812-8462

FAX: 045-812-8467

<https://www.ferris.ac.jp/information/campus-center/volunteer-center/>